

幼児期における自己およびまわりの人々 についての認識の発達

日下正一*・須々木百合子**・青木倫子**・風間節子**

小林孝子**・坂口やちよ**・千村直子**

I 問題と目的

幼児教育の現場では子どもの内面（心）の把握ということが強調されながら、実際には表面的な理解に終わっていたり、「～ができる・できない」という能力面だけの把握へと目が向けられたりしがちである。幼児期（4～6歳頃）の子どもたちがまわりの人々を、そして自分自身をどのように見ているのか、ということ、つまり他者認識や自己認識（意識）は、子どもの人格発達の上でも中心的な柱となっているものであり、これらを明らかにすることは子どもの内面の真の理解にとってとくに重要な意味をもつと考えられる。

しかしながら、松田（1983）も指摘するように、幼児の自己意識の発達の研究は、言語表現能力の制約（自分のことをことばで適切に表現することが難しいこと）や方法論上の困難さ（アンケート調査法などを用いることができないので、直接の聞き取り調査となるが、幼児と調査者との間で短時間にラポールの形成が難しいこと）、さらには幼児期における自己の内面の意識化の困難さなどもあってあまりおこなわれていない。

その中にあって都筑（1981）は、「発達の力動過程（Dynamisme Évolutif）」の検査（ザゾ、

1974）と呼ばれる一種の投影的な手法（過去一現在一未来の時間軸上で発達・変化していく自己に対する意識や価値づけを検討するもの）を用いて、現在の自己についての意識（赤ん坊、大人、自分の今の年齢の中から一番なりたいもの・なりたいもの・なりたくないものを選ばせる）、自己の将来の発達についての意識、過去の変化についての意識、の3つの側面から4～6歳の幼児の自己意識の発達へのアプローチを試みている。

このアプローチによって都筑は、年齢とともに自己に対する意識が次第に強くなること、自己に内在する身体的成長・発達の価値の自覚から社会的な成長・発達の価値の自覚へと幼児の自己の将来に対する意識が移っていくこと、現在の自己と過去の自己との相違が次第に明確に意識されていくことを明らかにし、「4～6歳児では、具体的に目に見える行動や自己の身体的諸側面が強く意識される傾向にあるが、年齢とともに、未分化な水準であるにしても、具体的・外面的な自己意識から抽象的・内面的な自己意識への発達が見られる」と結論づけている。

一方、高取・福田（1985）の研究は、子どもに言語報告を求める面接法を用いており、その意味では直接的な手法といえる。「言語・コミュニケーション・自一他像の自覚の発達」の中の自一他像（「友達はどうな子か」と「あなたはどんな子か」）に関する結果についてのみ見ると、小1で性格や能力などの内面的特質に関するものが幼児

* 長野県短期大学

** 長野県短期大学付属幼稚園

(3～6歳)と比較して増加してくること、とくに、年長児段階での能力に関する記述が、「サッカーが上手だ」とか「なわとびができる」とかのたんに個人的側面に限定されているのに、小1になると「クラスで一番速く走る」というように他の子どもと比較しての能力の評価が出現することが明らかにされている。

幼児期の自己意識に関するこうした数少ない研究結果はいずれも、幼児の自己の認識が外面的なものから内面的なものへと発展することを示しているが、現時点での数少ない研究データによって幼児期の子どもの自己意識の発達を一般化するのはまだ無理があり、もう少し組織的な研究が必要とされる(松田, 1986)。その場合、外面的なものから内面的なものへの一般的な発達の方向性は認めるにしても、例えば、児童期との連続性の中における幼児期の自己意識の発達に固有のものは何か、を具体的に明らかにしなければならないし、自己意識だけでなく自己意識と密接に関連していると思われるまわりの人々についての認識の研究も同時に進行させなければならない。

本研究の目的は、まわりの人々についての認識と自己についての認識の両方を扱い、4～5歳児においてこれらの認識がどのように発達するのか、を明らかにすることにある。

本研究では幼児の言語報告に頼る聞き取り調査法(面接法)を用いることになるが、上に述べた、幼児における自己意識の発達研究の方法論的な困難さについてはクラスの担任が直接聞き取りをおこなうことによって乗り越えたいと思う。また、言語表現の制約は常につきまとうが、これについては所定の質問項目だけでなくそれを発展させた幼児と調査者との自由な会話によってそれを補いながらも、一方ではことばによる表現上の制約もまた、自己の内面の意識化の困難さと同様、この時期の意識または認識の1つの特徴ととらえていきたい。

II 方法

1. 調査対象 4歳児61名(男29名・女32名)、5歳児57名(男24名・女33名)合わせて118名。
2. 調査期日・場所 1990年6月～7月。長野県短期大学付属幼稚園の保育室。
3. 調査手続き すべて個別調査。以下の調査項目について、各クラスの担任の教師が聞き取り調査を行った。調査者と幼児のことばは、カセットテープに録音された。ひとりあたりの所要時間は、10～15分。
4. 調査項目
 - A. まわりの人々についての認識
 - (1) 母親；「〇ちゃんのお母さんは、どんなお母さんかな？」「どうしてそう思うのかな？」
 - (2) 父親；「〇ちゃんのお父さんは、どんなお父さんかな？」「どうしてそう思うのかな？」
 - (3) 兄・姉・弟・妹；「〇ちゃんには兄・姉・弟・妹がいるかな？(「いる」と答えたら)なんという名前かな、今、何歳かな？」「〇ちゃんのお兄さん(△ちゃん)は、どんなお兄さんかな？」「どうしてそう思うのかな？」〔—以下、姉・弟・妹同じ。〕
 - (4) 友達；「いつも遊んでいる友達は誰かな？(ひとりだけ挙げさせる。「誰もいない」と答えたら、いつも遊んでいるような子どもを調査者の方で挙げる。)'その△ちゃんは、どんな子かな？」「どうしてそう思うのかな？」
 - B. 自己意識；「〇ちゃんは、自分のことをどんな子だと思う？」「どうしてそう思うのかな？」

III 結果と考察

1. 回答のカテゴリー化と集計方法について
子どもへの聞き取り調査の結果を、次の6つの

カテゴリーに分類した。以下は、それぞれのカテゴリーの説明と事例である。

A. 外見（顔の形、髪の色、長さ、体型など身体的特徴あるいは形態的特徴に関するもの）

①身体の一部あるいは形態的な特徴を挙げるもの

M.M. (4;3) 男: M君の弟のHちゃんのことを教えてね。Hちゃんて、どんな子かな?—「小さい。」—どうしてそう思うのかな?—「髪の毛が長い、ハサミで切って、そうすると、きれいになっちゃった。」

S.F. (5;7) 男: Sちゃんのお父さんは、どんなお父さんかな?—「いぼがいっぱいできている。」—それから?—「足に水虫ができていて、肩にでっかいいぼができています。」

②身体の部分の特徴を列挙するもの

K.M. (4;9) 男: K君のお父さんて、どんなお父さんかな?—「(顔が)丸くて、これだけ(2つ)目があって、足がビュンビュンビュンビュンって長い。」

K.N. (5;2) 男: K君のお母さんは、どんなお母さん?—「(机の上に指で)お母さんの絵を描きながら)こういうふうに顔が丸くて、くもみたいにやって、それでもって、大きい手してんの、それでさあ、足がこういうふうで、スカートはいてんの。」

O.S. (5;6) 男: O君のお母さんは、どんなお母さんかな?—「名前じゃないの?」—うん、いいよ。—「名前は、M子。」—それから?—「顔は丸で、髪の毛黒で、二つ目があって、おでこがあって、鼻があって、口があって。」

③（「自己認識」の質問で）自分の姿を鏡に映すことによって身体的な特徴を言うもの

T.W. (4;9) 男: T君は、自分のことどんな子だと思う?—「鏡ないの? 待って、見て来るね(鏡の前で)。ここに口があって、目があって、ここにウィウィっていうのついててね、これ何?」—眉毛のことかな?—「眉毛ついててね、歯がついてるの。」

④ひとつの身体的な特徴（メガネ）によって回答するもの

Y.A. (4;3) 男: Yちゃんのお母さんは、どんなお母さんかな?—「髪の毛長くて、メガネかけてるの。」—Yちゃんのお父さんは、どんなお父さんかな?—

「メガネかけてて、髭あるの。」—Yちゃんのお父さんは、どんなお父さんかな?—「メガネかけてない。」—仲良しの友達教えて?—「うーん、Aちゃんかな?」—友達のお父さんて、どんな子かな?—「メガネかけてない子。」—Yちゃんは、自分のことどんな子だと思う?—「メガネかけてない子。」

B. 行動（「～してくれる」、「怒られた」など自分と直接的なかわりのある行為を挙げるもの）

①自分の行為に対する反応を挙げるもの

S.Y. (5;11) 女: Sちゃんのお母さんは、どんなお母さんかな?—「けんかすると怒る。」

R.S. (5;1) 男: Rちゃんのお兄ちゃんは、どんなお兄ちゃん?—「いつもあたしが何か取ると怒る。おもちゃとか紙とか取ると、ダメって言うの。」

②自分に対して何かをしてくれる行為を挙げるもの

T.I. (5;10) 女: Tちゃんのお父さんは、どんなお父さんかな?—「私が、お勉強したいとき、お勉強のノート持って来てくれるの。」

K.K. (6;2) 女: Kちゃんのお母さんは、どんなお母さんかな?—「一緒に本読んでくれたりする。」—そのときKちゃんは、どう思うかな?—「いいと思う。」—どうして?—「うれしいから。」

U.I. (5;11) 女: Uちゃんのお姉さんは、どんなお姉さんかな?—「ジュニアチャーマーブリーマーちゃんて遊んでくれるの。」

③自分に対する行為を挙げて詳しく説明するもの

A.Y. (4;5) 男: Aちゃんのお母さんは、どんなお母さんかな?—「怒るけど、それで、泣くけど。」—Aちゃんも怒られることあるんだね、どうしてお母さん怒るんだろう。—僕のために、大人になって困る(困らない)ために。」—今度は、お父さん、Aちゃんのお父さんは、どんなお父さんかな?—「怒らない。」

Y.K. (6;1) 女: Yちゃんの妹のOちゃんは、どんな妹かな?—「私がこの幼稚園において、帰るとき、お母さん迎えに来るでしょ、そのとき、ついて来ないときもあるけど、ついて来るとき『お姉ちゃん』って言うてね、私が好きなんだけど、私になんかやると、Yちゃんなんか大嫌いって言うの。」

C. 行動（「会社行っている」、「勉強する」など、自分と直接的なかわりのない行動によって説明するもの）

①日常的な行動によって説明するもの

K. K. (6; 2) 女: Kちゃんのお父さんは、どんなお父さんかな? —「日曜日に野球に行くよ。」

E. A. (5; 6) 女: Eちゃんのお父さんは、どんなお父さんかな? —「会社で遅いときとか、早いときがある。だけど、きのうは泊まりだから帰って来なかった。」

M. M. (4; 3) 男: M君のお父さんは、どんなお父さんかな? —「ビール飲んでばかりいて、酔っぱらっちゃった。」

Y. M. (6; 0) 男: 仲良しの友達を一人だけ教えて? —「S君。」—S君は、どんな子かな? —「(自分以外の子を) いつもはたいたりしてる。何もしてないのに。」

K. T. (5; 1) 男: Kちゃんのお兄ちゃんは、どんなお兄ちゃんかな? —「学校行ってるお兄ちゃんと思う。算数やってるよ。難しいよ。」

O. S. (5; 6) 男: Oくんのお兄ちゃんのWくんは、どんなお兄ちゃんかな? —「怒られてばかりのお兄ちゃん。」—誰に怒られるの? —「パパとママ。」—どうやって? —「勉強やりなさいって怒られる。」

D. 性格（「やさしい」、「恐い」など他者や自分を性格特徴によって説明するもの）

K. S. (4; 11) 女: Kちゃんのお母さんは、どんなお母さんかな? —「いつもね、いいお母さん。」—どうしてそう思うのかな? —「いつも何かしてくれるから。」—どういうことしてくれるの? —「お茶碗とか、お洗濯するとか。」—そういうことしてくれないとKちゃん、どうなるの? —「あのね、汚いとかね、何もたべられなくて、死んじゃう。」

K. T. (4; 5) 男: Kちゃんのお母さんは、どんなお母さんかな? —「いたずらすると怒るけどしなげればやさしい。」—そういうお母さんでどう思う? —「いいと思う。」

T. O. (5; 0) 男: T君のお父さんは、どんなお父さんかな? —「おこりんぼう。」—どんなときにおこりんぼう? —「たたりたりするとき。」—どうしてたたくんだらう? —「・・・。」—Tちゃんが、何もしていないのにたたくの? —「うん。」—どうし

てだらう? —「リモコンとかね、下とかどこかへやるの。」—隠しちゃうの? それは壊れるといけないからじゃないかな? —「壊さないよ。」

Y. M. (6; 0) 男: Y君のお父さんは、どんなお父さんかな? —「思い出せない。」—いつもどんなお父さんだと思ってる? —「恐くてやさしい。」—どうしてそう思うのかな? —「わかんない。」—どういうとき、恐かった? —「お姉ちゃんに何かしたとき、お父さんに言いつけるの。」—どういうときやさしいの? —「わかんない。」

M. K. (5; 11) 男: M君にはきょうだいいるかな? 何という名前かな? 今、何歳かな? —「Mちゃん、7歳。」—Mちゃんのお姉さんは、どんなお姉さんかな? —「やさしい。」—どうしてそう思うのかな? —「・・・。」—どんなとき、やさしいかな? —「わかんない。」

M. Y. (5; 10) 女: Mちゃんは、自分のことどんな子だと思う? —「うるさい子。」—どうしてそう思うのかな? —「いつもベラベラしゃべっているから。」

Y. M. (6; 0) 男: Y君は、自分のことどんな子だと思う? —「ばかな子。」—どうしてそう思うのかな? —「そんなこと言ってもわかんない。」—どういうところがばかだと思うの? —「眠るところ。」

E. その他（「外見」、「行動」、「性格」以外のものによって答えるもの）

①氏名を言うもの

S. N. (4; 4) 男: S君のお母さんは、どんなお母さんかな? —「K子さん。髪の毛がゼリーみたいにポヨン、パヒャンってなってるの。」(注: 後半部分は「外見」にあたる。)

②関係あることについて単語のみを挙げるもの

Y. M. (4; 7) 男: Y君のお兄ちゃんのS君は、どんなお兄ちゃん? —「学校、お友達。」—仲良しの友達は誰かな? —「K. H. 君。」—K君で、どんな子だと思う? —「Y. M. 君。」—Yちゃんは、自分のことどんな子だと思うかな? —「りす組。」

③性別で言うもの

Y. N. (4; 5) 女: Yちゃんの仲よしの友達を一人だけ教えて? —「うんとね、S君。」—「S君でどんな子かな? —「男の子。M君もいい顔、かっこいい顔してる。」—M君のこと? S君のこと? —「両方、

男だから。」(注:「外見」も含まれている。)

④家庭関係や所属関係で答えるもの

H. F. (4; 3) 男: H君の仲良しの友達是谁かな?

——「S君。」——S君は、どんな子かな?——「短大幼稚園のS君。」——どんな人?——「頭で、めめあって、手があって、足もあるの。」(注:後半部分は「外見」。)

T. N. (4; 10) 男: 自分のことどんな子だと思う?——「お母さんの子ども。」——お母さんやお父さんは、T君のこと何て言う?——「知らない。」

H. S. (5; 1) 男: H君の仲良しの友達教えて?——「S君。」——S君で、どんな子だと思う?——「S君ちに赤ちゃんいる。4人家族かも知れない。」——どうしてそう思うの?——「だって、S君ち行ったことあるから。」

F. わからない・無回答

T. K. (5; 2) 男: T君は、自分のことどんな子だと思う?——「わかんない。」——どうしてわからないのかな? 不思議だね、だって、お母さんやお父さんやお姉さんのことは、よく知っているのね。——「だってさ、自分のことは知らない。」

T. O. (4; 11) 男: Tちゃんは、自分のことどんな子だと思う?——「忘れた。」——お父さんやお母さんは、Tちゃんのこと何て言う?——「ママはかわいいって言うけど、パパはかわいくないって言う。」——Tちゃんは どう思う?——「わかんない。」

2. 結果の分析

(1) 以上の6つのカテゴリーに分類した上で、4歳児と5歳児その人数と%を表したものが、TABLE 1~TABLE 8である。これらの表を見ると、「外見」は4歳から5歳にかけて大幅に減少し、また「行動」も減少または横ばいの傾向にあるのに対して、「性格」は4歳から5歳にかけて増加している。このことから、4歳児では「外見」や「行動」など外面的なものによって自分やまわりの人々をとらえているが、5歳になると内面的なもの(「性格」)に目を向けるようになることがわかる。

(2) 次に、TABLE 1~TABLE 8に基づき「自分と直接的なかわりのある行動」と「直接的なかわりのない行動」とを父、母、友達について比較してみたが、年齢差はほとんど見られず、4歳児も5歳児も「行動」のうち約半数は自分と直接関係のある行動でまわりの人々をとらえていることが明らかとなった。自分にかかわりのある行動の中でも、とりわけ「(自分に)何かをしてくれる」という回答がかなり多い(「直接的なかわりのある行動」の中で母; 34.0%, 父; 63.3%, 友達; 50.0%を占めている)。

(3) さらに、まわりの人々(母・父・友達)の間に認識の差があるかどうか、また他者と自己の間に認識の差があるかどうかを見るために作成したのが、TABLE 9である(ただし、兄弟姉妹については人数が相対的に少ないので省略した)。これによると、「無回答・わからない」が父と母に比べて友達の場合には全体で約2倍以上に増加し、さらに自分になるとそれが5~6倍にも増加する。それに対して「性格」は5歳児では大きな差はないが、4歳児では友達で多少減り、自分では半分になる。また「行動」についても、5歳児では父母と友達の間には差はないが、自分になると半分に減少し、4歳児においても友達で約半数に、自分になると約1/3になる。さらに、「外見」は父・母・友達間では大きな差はないが、自分になると約半分に減少する。これらの結果から、他者の間では父母よりも友達の方が認識が難しく、さらに他者よりも自己の方が見えにくいことがわかる。以下に「友達」、「自分」が見えにくい事例を示そう。

①「友達」の認識が困難な事例

A. M. (5; 0) 女: Aちゃんのお母さんは、どんなお母さんかな?——「やさしいお母さん。」——どうしてそう思うのかな?——「ご飯作ってくれるから。」——お父さんは、どんなお父さんかな?——「お父さんもやさしい。」——どうしてそう思うのかな?——「わかんない。」——どういうときやさしい?——「遊んでいる

TABLE 1 他者(母)についての認識

(数字は人数, 括弧内は%, ただし複数回答)

カテゴリー	年 齢	4 歳児 (n=61)	5 歳児 (n=57)	全 体 (n=118)
A. 外見		26 (42.6)	12 (21.1)	38 (32.2)
B. 行動(ある)		18 (29.5)	12 (21.1)	30 (25.4)
C. 行動(ない)		13 (21.3)	5 (8.8)	18 (15.3)
D. 性格		16 (26.2)	28 (49.1)	44 (37.3)
E. その他		5 (8.2)	1 (1.8)	6 (5.1)
F. わからない・無回答		3 (4.9)	4 (7.0)	7 (5.9)

TABLE 2 他者(父)についての認識

(数字は人数, 括弧内は%, ただし複数回答)

カテゴリー	年 齢	4 歳児 (n=61)	5 歳児 (n=56)	全 体 (n=117)
A. 外見		30 (49.2)	13 (23.2)	43 (36.8)
B. 行動(ある)		12 (19.7)	11 (19.6)	23 (19.7)
C. 行動(ない)		15 (24.6)	8 (14.3)	23 (19.7)
D. 性格		12 (19.7)	22 (39.3)	34 (28.9)
E. その他		9 (14.8)	1 (1.8)	10 (8.5)
F. わからない・無回答		3 (4.9)	4 (7.1)	7 (6.0)

TABLE 3 他者(兄)についての認識

(数字は人数, 括弧内は%, ただし複数回答)

カテゴリー	年 齢	4 歳児 (n=20)	5 歳児 (n=17)	全 体 (n=37)
A. 外見		7 (35.0)	2 (11.8)	9 (24.3)
B. 行動(ある)		3 (15.0)	4 (23.5)	7 (18.9)
C. 行動(ない)		6 (30.0)	4 (23.5)	10 (27.0)
D. 性格		6 (30.0)	6 (35.3)	12 (32.4)
E. その他		3 (15.0)	2 (11.8)	5 (13.5)
F. わからない・無回答		1 (5.0)	1 (5.9)	2 (5.4)

TABLE 4 他者(姉)についての認識

(数字は人数, 括弧内は%, ただし複数回答)

カテゴリー	年 齢	4 歳児 (n=20)	5 歳児 (n=12)	全 体 (n=32)
A. 外見		8 (40.0)	1 (0.3)	9 (28.1)
B. 行動(ある)		5 (25.0)	5 (41.7)	10 (31.3)
C. 行動(ない)		4 (20.0)	0 (0.0)	4 (12.5)
D. 性格		6 (30.0)	9 (75.0)	15 (46.9)
E. その他		4 (20.0)	0 (0.0)	4 (12.5)
F. わからない・無回答		1 (5.0)	3 (25.0)	4 (12.5)

TABLE 5 他者(弟)についての認識

(数字は人数, 括弧内は%, ただし複数回答)

カテゴリー	年 齢	4 歳児 (n=17)	5 歳児 (n=14)	全 体 (n=21)
A. 外見		10 (58.8)	2 (14.3)	12 (57.1)
B. 行動(ある)		3 (17.6)	1 (7.1)	4 (19.0)
C. 行動(ない)		2 (11.8)	3 (21.4)	5 (23.8)
D. 性格		0 (0.0)	7 (50.0)	7 (33.3)
E. その他		1 (5.9)	0 (0.0)	1 (4.8)
F. わからない・無回答		1 (5.9)	1 (7.1)	2 (9.5)

幼児期における自己およびまわりの人々についての認識の発達

TABLE 6 他者(妹)についての認識

(数字は人数, 括弧内は%, ただし複数回答)

カテゴリー	年 齢	4 歳児 (n=10)	5 歳児 (n=16)	全 体 (n=26)
A. 外見		5 (50.0)	3 (18.8)	8 (30.8)
B. 行動(ある)		3 (30.0)	3 (18.8)	6 (23.1)
C. 行動(ない)		3 (30.0)	5 (31.3)	8 (30.8)
D. 性格		1 (10.0)	5 (31.3)	6 (23.1)
E. その他		0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
F. わからない・無回答		0 (0.0)	1 (6.3)	1 (3.8)

TABLE 7 他者(友達)についての認識

(数字は人数, 括弧内は%, ただし複数回答)

カテゴリー	年 齢	4 歳児 (n=61)	5 歳児 (n=57)	全 体 (n=118)
A. 外見		22 (36.1)	11 (19.3)	33 (28.0)
B. 行動(ある)		11 (18.0)	6 (10.5)	17 (14.4)
C. 行動(ない)		4 (6.6)	10 (17.5)	14 (11.9)
D. 性格		9 (14.8)	19 (33.3)	28 (23.7)
E. その他		13 (21.3)	2 (3.5)	15 (12.7)
F. わからない・無回答		9 (14.8)	13 (22.8)	22 (18.6)

TABLE 8 自己についての認識

(数字は人数, 括弧内は%, ただし複数回答)

カテゴリー	年 齢	4 歳児 (n=61)	5 歳児 (n=57)	全 体 (n=118)
A. 外見		14 (23.0)	6 (10.5)	20 (16.9)
B. 行動(ある)		11 (18.0)	5 (8.8)	16 (13.6)
C. 行動(ない)		0 (0.0)	1 (1.8)	1 (0.8)
D. 性格		7 (11.5)	21 (36.8)	28 (23.0)
E. その他		8 (13.1)	1 (1.8)	9 (7.6)
F. わからない・無回答		23 (37.7)	23 (40.4)	46 (39.0)

TABLE 9 他者と自己についての認識

(数字は人数)

カテゴリー	対 象 年 齢	母		父		友 達		自 分	
		4 歳児 (n=61)	5 歳児 (n=57)	4 歳児 (n=61)	5 歳児 (n=57)	4 歳児 (n=61)	5 歳児 (n=57)	4 歳児 (n=61)	5 歳児 (n=57)
外	見	26	12	30	13	22	11	14	6
行	動	31	17	27	19	15	16	11	6
性	格	16	28	13	23	9	19	7	22
そ	の 他	5	1	8	1	13	2	8	1
無回答	・ わからない	5	5	3	4	8	13	26	24

とき。」——何してあそぶの?——「忘れちゃった。」
 ——一番仲良しは誰?——「Hちゃん。」——Hちゃん
 は、どんな子かな?——「わかんない。」——Hちゃん
 のどんなところが好き?——「お顔。」——どうしてそ
 う思うのかな?——「わかんない。」

(T・M. 4; 10) 男: T君のお母さんは、どんなお母さ

んかな?——「髪の毛が長い。」——T君といるとき
 はどんなお母さん?——「遊んでくれる。」——そうい
 うお母さんどう思う?——「やさしいと思う。」——お
 父さんは、どんなお父さん?——「髪の毛がもじゃも
 じゃ。」——T君といるときはどんなお父さん?——「遊ん
 でくれる。」——そういうお父さんどう思う?——「ヤ

さしいと思う。」——いつも遊んでいる友達是谁かな？
——「Y君。」——Y君は、どんな子かな？——「わかんない。」——どんな子ども？——「Y君のお母さんの子ども。」

S. I. (5; 6) 女: Sちゃんのお母さんは、どんなお母さん？——「やさしい。」——どうしてそう思うのかな？——「わかんない。」——ぜんぜん怒られない？——「うん。」——Sちゃんのお父さんは、どんなお父さんかな？——「やさしい。」——どうしてそう思うのかな？——「・・・。」——どんなとき、そう思う？——「わかんない。」——考えてみて？——「あのね、ご飯作ってくれるとき。」——わー、いいね。他には？——「・・・。」——いつも遊んでいる友達是谁かな？——「Sちゃん。」——そのSちゃんは、どんな子かな？——「わかんない。」——もう一度考えてみて？——「・・・。」

②「自分」の認識が困難な事例

S. T. (4; 5) 男: 最初にね、S君のお母さんのこと教えてね。S君のお母さんとどんなお母さん？——「うんとき、やさしくってさ、買い物行くときさ、うんとき、Sちゃん(自分のこと)も買い物に連れて行ってくれるの。」——買い物に連れてってくれるのやさしいの？——「だってさ、Sちゃんさ、ママがお迎えに行くときさ(幼稚園に迎えに来るとき)、うんとき、おもちゃひとつ置いてあげるの(買ってくれるの意味)。」——え、毎日？——「毎日じゃないけど、月曜日だけ。」——じゃあね、Sちゃんは自分のことどんな子だと思う？——「わかんない。」——どうしてわかんないんだろうね。——「だって、前のことも知らないから今のこと知らない。だって、お母さんに聞いても忘れちゃうの。」

A. I. (5; 0) 女: Aちゃんの仲良しの友達教えて？——「えっと、Hちゃん。」——「Hちゃんてどんな子だと思う？——「やさしい。」——どうしてそう思うの？——「そういうことしかないから、遊んでくれるところが(やさしい)。」——じゃあ、Hちゃんは、自分のことどんな子だと思う？——「知らない。」——どうしてかな？——「知らないから。自分だから。」

R. O. (5; 9) 男: R君のお母さんは、どんなお母さんかな？——「ちょっと怒る。」——どうしてそう思うのかな？——「すこしなんかやっただけなのにすぐ怒る。」——なんかって？——「なんかのフタあげたときとか。」——R君のお父さんは、どんなお父さんかな？——「やさしい。」——どうしてそう思うのかな？——「怒られてるとき、もういいでしょってママにいつとめてくれ

る。」——R君は、自分のことどんな子だと思う？——「わかんない。」——自分のところで好きなところある？——「ディズニーランド。」——R君が好きな場所じゃなくて、自分のところで好きなところはある？ 顔とか、やさしいとか。——「ママのお手伝いしたり、Mちゃん(妹)と遊んでいるところ。」——どうしてそう思うの？——「何かしてもらえる。」——何かって？——「パパがお小遣いくれたりしてくれる。」

3. 「性格」とその理由の分析

最後に、「性格」とその理由について分析することにする。まず、性格を表すことばとしては、他者(母・父・兄・姉・弟・妹・友達)では「やさしい」が圧倒的に多く、次に「(少し、ちょっと)こわい」が多い。「やさしい」は、母; 35/48名、父; 26/41名、兄; 8/15名、姉; 12/16名、弟; 3/8名、妹; 2/6名、友達; 20/34名とずば抜けて多い(TABLE 10)。また、「自分」では「やさしい」、「いい子」、「お利口」が多く、その数はそれぞれ32名中9名、7名、5名で、全体の約2/3を占めている(TABLE 11)。

これらのことから、4～5歳児が性格に関して用いることばはいくつかに限定されており、他者の場合には「やさしい—こわい」という次元で判断していることがわかる。一方、「自分」の場合の「やさしい」、「いい子」、「お利口」はどれも、日常生活の中で周囲の大人が子どもに期待している「良い子像」を表すことばであることに気づく。

次に、他者の性格についての理由を次のa～dの4つのタイプに分類したものが、TABLE 12である。それらのタイプとその事例は、次の通りである。

a ; 自分と直接的なかわりのあるもの

S. T. (4; 10) 男: Sちゃんのお母さんは、どんなお母さんかな？——「やさしいお母さん。」——どうしてそう思うのかな？——「だってね、いつもね、何か買ってくれるから。」——どういうもの買ってくれるのかな？——「あのね、おもちゃとかお菓子とか。」

K. M. (5; 4) 女: Kちゃんのお父さんは、どんなお

父さんかな?—「お父さんは、やさしい。」—どうしてそう思うのかな?—「お母さんがすぐ怒ると、お父さんがすぐやさしくしてくれる。」—どうやってやさしくしてくれるの?—「たぶんね、お母さんが怒ったら、そんなに怒らなくてもいいじゃないかって言うから。」—やさしいんだね。—「でもね、けんかしたことあるよ。Y(妹)もけんかしたことあるよ。」

O.R.(5;9) 男: Oちゃんのお姉さんてどんなお姉さんかな?—「やさしい、ときどき怒る。」—どうしてそう思うのかな?—「ときどき本当に怒るから。」—やさしいと思うのはどうして?—「なんか手伝ってくれたりするから。」

b; 自分と直接的なかわりのないもの

H.Y.(6;0) 男: Yちゃんのお母さんは、どんなお母さんかな?—「やさしいお母さん。」—どうしてそう思うのかな?—「顔がやさしいから。」

Y.H.(5;3) 女: Hちゃんのお母さんは、どんなお母さんかな?—「忘れんぼうだよ。」—どうしてそう思うのかな?—「だって、いつもなんか忘れてる。」

N.Y.(5;9) 女: いつも遊んでいる友達是谁かな?—「Kちゃん。」—Kちゃんは、どんな子かな?—「やさしい。」—どうしてそう思うのかな?—「いつも笑っているから。」

c; その他・理由になっていないもの

M.K.(6;1) 女: Mちゃんのお母さんは、どんなお母さんかな?—「髪が短くてやさしいお母さん。」—どうしてそう思うのかな?—「あのね、いっぱいね、わたしが半日のとき(半日保育のとき)とかね、いつもいつもではないけどね、髪切って来るときある。」—Mちゃんが幼稚園に来ている間におしゃれして来るんだ。—「うん、心のおしゃれしてくるんだって。」

H.S.(5;0) 男: H君のお母さんは、どんなお母さんかな?—「顔が三角みたいで、やさしくて、それでね、あの、ご飯作ってくれたり、なんか、水飲みたいときに、水出してくれたり、それでね、あのね、ハムスターに餌あげたりするの。ひとり死んじゃった。お姉ちゃんが、机の中に入れてたままにしておいたの。」—へえー、そうなんだ、ハムスターがいるんだね。ねえ、H君は、お母さんがやさしいなあってどうして思うの?—「あのね、少し近くだから。だからそう思う。」

TABLE 12 から、他者の性格についての理由としては、「～してくれるから」に代表されるような自分と直接的なかわりのある理由がかなり多いことがわかる。全体で見ると4歳児では75.4%、5歳児では57.4%、と、4歳児の方にこの理由が多い。

一方、自己の性格とその理由の間には次のような対応関係が見られる。

「やさしい」——「～してあげるから」
 「いい子」——「怒られないから」、「父母が言っているから」
 「お利口」——「お手伝いするから」

そして、これらの性格の理由も限られた表現が多いことに気づくが、これもまた性格を表すことと同様、子どもに対する周囲の人々の日常のことばが強く影響していると考えられる。以下にその事例を挙げよう。

①「やさしい——～してあげるから」

S.T.(5;9) 男: S君は、自分のことどんな子だと思う?—「やさしいと思う。」—「どうしてそう思うのかな?—「いつもDちゃん(弟)と遊んであげるから。」

J.K.(5;6) 男: J君は、自分のことどんな子だと思う?—「えー、年少さんが泣いていたら、ハンカチで涙拭いてあげる。」—そういうの何て言うの?—「やさしい。」—他にもある?—「お母さんがね、お豆腐買って来てって言ったらね、お金持って行って来る。」—どこまで行けるのかな?—「すぐ近くの駐車場のそば。」

②「いい子——怒られないから・父母が言っているから」

A.Y.(4;5) 男: Aちゃんは、自分のことどんな子だと思う?—「いい子だと思う。」—どうしてそう思うのかな?—「えーとね、ときどきね、怒らないときはいい子ねって言う、ママ。」

K.K.(6;2) 女: Kちゃんは、自分のことどんな子だと思う?—「いい子。」—どうしてそう思うのかな?—「パパとママが言っているから。」

③「お利口——お手伝いするから」

H. D. (4; 3) 女: Hちゃんは、自分のことどんな子だと思ふ?——「お利口と思ふ。」——どうしてそう思ふのかな?——「お母さんのお手伝いしてあげるし、包丁とかいっぱい切つてあげるし、やってる。」

K. S. (4; 10) 女: Kちゃんは、自分のことどんな子だと思ふ?——「お利口。」——どうしてそう思ふのかな?——「いつもね、お友達と遊んでてね、お使い頼ま

れるとお兄ちゃんと一緒に行くの。」——お手伝いいやではない?——「うん。」——どうして?——「楽しい。」——どうしていいの?——「だってね、パーティーみたい。」——どうしてパーティーなの?——「ご飯のときとか、ジュース飲んでるの。お母さんの言うこと聞いていい子にしていると、いつもご飯にアイスクリームとかジュース出してくれる。」——そういうのが、パーティーみたいでいいんだね。——「そう。」

TABLE 10 他者の性格について

(数字は人数)

母	やさしい 35(名)	こわい 少しこわい 7	おこりん ぼう 2	おもしろ い 1	いいお母 さん 1	忘れんぼ う 1	やさしいけど 怒るとこわい 1	計 48				
父	やさしい 26(名)	いいお父 さん 3	おこりん ぼ 3	かわいい 2	かっこい い 1	おもしろ い 1	こわい 1	えらい 1	やだお父 さん 1	怒るけどやさ しい時はやさ しい 1	計 40	
兄	やさしい 8(名)	おこりん ぼ 3	いやだ 2	ちょっと いじわる 1	悪いお兄 ちゃん 1	計 15						
姉	やさしい 12(名)	忘れんぼ う 1	いじわる 1	おこりん ぼ 1	計 15							
弟	やさしい 3(名)	やんちゃ 1	悪い子 1	こわい 1	ブランコ こわい 1	いたずら っ子 1	計 8					
妹	やさしい 2(名)	いじわる 2	おこりん ぼ 1	いたずら ぼうず 1	計 6							
友達	やさしい 20(名)	かわいい 3	いい人 3	元気がい い 2	おもしろ い 2	お利口 1	静かな子 1	怒るとこ わい 1	いやな子 1	計 34		

TABLE 11 自己の性格について

(数字は人数)

やさしい 9(名)	いい子 7	お利口 5	うれし い 1	かっこ いい 1	強い心 1	変な子 1	うるさ い子 1	静かな 子 1	少しお利口 だけ少し おぼか 1	いたず ら 1	元気な 子 1	ぼかな 子 1	おっか ない人 1	計 32
--------------	----------	----------	---------------	----------------	----------	----------	----------------	---------------	---------------------------	---------------	---------------	---------------	-----------------	---------

TABLE 12 他者の性格についての理由のタイプ

	4歳児					5歳児				
	a	b	c	d	T	a	b	c	d	T
母	13	0	3	0	16	19	3	6	4	32
父	13	1	2	0	16	15	4	3	5	26
兄	6	1	0	1	8	4	1	0	3	7
姉	7	0	0	0	7	7	1	0	1	9
弟	0	1	0	0	1	2	1	3	1	7
妹	2	0	0	0	2	2	1	0	1	4
友達	4	5	1	0	11	13	8	1	1	23
計	46	8	6	1	61	62	19	13	16	108

注) 数字は人数、ただし複数回答。

IV 全体的考察

本研究の目的は、4～5歳児の幼児におけるまわりの人々（他者）と自己についての認識の発達を明らかにすることにあつた。本研究の特長は、自己意識（認識）だけでなく他者認識をも対象としたこと、聞き取り調査には幼児のクラス担任があつたこと、である。以下、本研究で明らかになつた次の4点について考察することにする。

(1) まず、4歳児では外見（顔の形、髪の毛の長さ、体型などの身体的・形態的特徴）や具体的な行動（行為）によって自己やまわりの人々をとらえているが、5歳児になると外見や行動よりも性格に目を向ける傾向が強くなることが明らかとなつた。このことは、この頃には自己認識だけでなく他者認識も、直接観察可能な外面的な特徴からより内面的な特質へと進行することを意味している。こうした結果は、自己意識の発達に関する都築（1981）や高取・福田（1985）らの従来の研究結果と一致するものである。しかし、後にも述べるように、まわりの人々や自己の内面的な特質（性格）への移行が見られるといつても、この内面的なものに対する意識はかなり制限されたものであることに注意する必要があるだろう。

(2) 次に、まわりの人々（他者）に比べて自己についての認識は難しいこと、また他者の間でも父母よりも友達についての認識が多少難しいことが明らかとなつた。とりわけ前者についていうと、他者については外見や行動、または性格によって答えるのに、自己になると「わからない」と答える者が多くなることから、幼児の段階では自己を対象化することが非常に難しいことがわかる。幼児における自己—他者認識の関係を問題としたこのような研究はほとんど見られないが、小学生11名の1～5年までの作文を縦断的に分析することによって児童期の自己認識の発達を明らかにしようとした守屋・森・平崎・坂上（1972）の研究に

おいては、自己の認識が他者の認識よりも遅れることが指摘されており、自己を客体化することの難しさを示すものと受けとめられている。さらに、自己認識は、まず個人としての他者の認識をもとにして始まり、次第に集団としての他者（つまり、自分の所属しない集団）の認識を媒介とした深まり、集団の中の個としての自己認識へと進む、という守屋らの結論は、幼児期の自己—他者の認識の発達を考える上でもきわめて示唆に富むものといえよう。

(3) さらに、本研究において他者や自己の内面的な特質の認識を示すものとしてカテゴリー化された「性格」についてさらに詳細に分析した結果、他者については「やさしい」と「こわい」がほとんどであり、「やさしい—こわい」という、たった1つの次元で他者を認識していることが読み取れる。一方、自己については「やさしい」、「いい子」、「お利口」ということばが全体2/3を占めていることから、かなり単純で大まかな自己認識がなされていることがわかる。また、これらのことばは日常的にまわりの人々（とくに父母）が幼児に対して下す評価のことばと一致しているというのも興味深い。

(4) 最後に、性格についての理由を見てみると、他者についても自己についても過去の、あるいは日常的な具体的な行動を挙げて説明している。他者については「(自分に)～してくれるから」が（「やさしい」の）理由として挙げられることが多く、また自己の性格と理由の間には、「やさしい—～してあげるから」、「いい子—怒られないから」、「お父（母）さんが（そう）言っているから」、「お利口—～してあげるから」という対応関係が見られた。このように、性格に代表される内面的な特質の認識といつても、それを表すことばが限定されていることから、かなり大まかで未分化なものであること、そして過去の、または日常のかなり具体的な行動または行為によって支えられたものであることが明らかである。

以上のことから、幼児期においてはまわりの人々と自己についての認識が外面的なものから内面的なものへと進むが、この時期の内面的な把握は具体的な行動に支えられているという意味できわめて外面的な色彩の濃いものである。したがって、4～5歳頃の他者と自己の認識は外面的なものから内面的なものへの移行の初期的な段階である、と特徴づけることができよう。

こうした研究結果は、幼児教育実践にとっても意味のあるものである。とくに、まわりの人々や自己をどのように認識しているのか、またこの時期において他者や自己の認識がどのように発達するのか、を知ることは、幼児の内面の把握と指導に有効な手掛かりを提供してくれるからである。

引用文献

- 松田 惺 1983 自己意識 三宅・村井・波多野・高橋 編 児童心理学ハンドブック 金子書房 640-664
- 松田 惺 1986 自己意識の発達に関する最近の研究 教育心理学年報 25 54-63
- 守屋慶子・森万岐子・平崎慶明・坂上典子 1972 児童の自己認識の発達 教育心理学研究 20 205-215
- 高取憲一郎・福田真由美 1985 言語, コミュニケーション, 自己他像の自覚の発達 鳥取大学教育学部研究報告(教育科学) 27 277-286 (高取憲一郎 1987 心理学のルネサンス 法政出版 182-196)
- 都筑 学 1981 幼児の自己意識の発達 教育心理学研究 24 70-74
- ザゾ, B. 久保田正人・塚野州一訳 1974 発展の力動過程 ザゾ, R. 編 学童の生長と発達 明治図書 210-252 Zazzo, B. 1969 Le dynamisme évolutif chez l'enfant. In Zazzo, R. (ed.) Des garçons de 6 à 12 ans. Paris: P. U. F.